

海況・サバ・イワシ・マアジ長期漁海況予報

平成30年7月30日に平成30年度第1回太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報（平成30年8月～12月の見通し）が発表されましたので、その結果を基に本県海域での予報を報告します。

■ 海況

黒潮：A型で推移する。流路は伊豆諸島付近を北上する。
 （説明）昨年8月に大蛇行になり、継続しています。年内は引き続き継続します。

沿岸水温：相模湾及び伊豆諸島北部海域は「**平年並**」～「**高め**」で推移する。暖水波及時に「**極めて高め**」となる。
 （語句説明）平年並：平年値±0.5℃程度、
 高め：平年値+1.5℃程度
 極めて高め：平年値+2.0℃程度

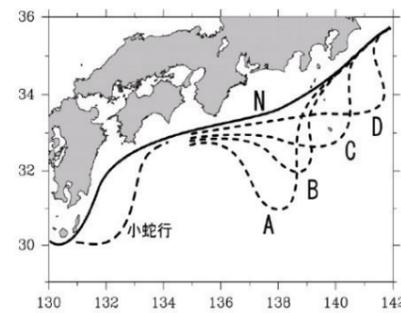


図1 黒潮流型の分類

■ さば類（マサバ）

来遊量：前年を上回る。
 （説明）マサバ太平洋系群の資源量は、2000年代以降増加していますが、神奈川県沿岸の定置網や一本釣りでの漁獲量は、資源量の増加に反して、ここ数年減少しています。

これまでの研究から、東京湾～相模湾におけるマサバ漁獲量は、①当年6月の伊豆大島周辺の塩分、②当年5月の伊豆半島東岸定置網のマサバ漁獲量、③当年8月の東京湾の水温と関係があると考えられています。この関係に基づき、今期の来遊量を予測したところ、前年を上回ると見込まれました。

ただし、②の当年5月の伊豆半島東岸定置網のマサバ漁獲量が前年の約10倍と極端に大きい値であったため、予測値が高めに出ています。実際は、来遊量が伸びないと考えられます。

魚体サイズは、1～5月に県漁業調査指導船「江の島丸」が伊豆諸島周辺で行った調査で尾叉長29～32cm（体重280～390g）主体に漁獲されたことや、7月現在、相模湾の定置網で同サイズが多く漁獲されていることから、今シーズンはこのサイズが主体となるでしょう。



■ マイワシ

来遊量：前年を下回る。
 （説明）マイワシ太平洋系群の資源量は、2010年以降増加しており、太平洋側各地で漁獲量が増加傾向にあります。

本県沿岸域では、6月から0歳魚（2018年級群）の来遊が始まり、7月には前年および平年（過去5年平均）を大きく上回るまとまった漁獲量となってきました。

2018年8月～12月は、0歳魚が漁獲の主体となるでしょう。下半期の本県沿岸域の0歳魚の漁獲量は、相模湾の春シラス漁におけるマシラス漁獲量と正の関係が認められています。今年のマシラス漁獲量は前年同期の44%であったことから、下半期の漁獲量は前年を下回るでしょう。



■ カタクチイワシ

来遊量：低調な前年並。
 （説明）カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、2004年以降減少しており、特に黒潮親潮移行域等、沖合域の分布量の減少が顕著になっています。魚体サイズの傾向も高水準期を支えた大型成魚（体長12cm以上）の来遊が激減しており、未成魚～小型成魚が主体となってきています。

2018年8月～12月は、未成魚（体長9cm未満）が漁獲の主体となるでしょう。7月までの漁況経過からしても、8月以降、急激に来遊量が増加するとは考えにくい状況にあります。



■ マアジ

来遊量：前年を下回る。
 （説明）マアジ太平洋系群の資源量は、1997年以降減少傾向で、相模湾沿岸定置網の漁獲量も2009年以降減少し続けています。近年の資源状態は中位～低位で減少傾向です。

例年、上半期に相模湾へ来遊するマアジは0～1歳魚が主体となりますが、2018年上半期のマアジ0歳魚漁獲量が低調であったこと、および東シナ海由来の2017年級群および2018年級群の来遊もあまり期待できないことから、2018年8月～12月の来遊量は前年を下回るでしょう。

